

# Arthuriana Japonica: Newsletter No. 33

October 2020

---

## 国際アーサー王学会日本支部会報 Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

---

### 目次

I. 2019年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	2
研究発表要旨	3
シンポジウム要旨	4
II. 電子化について	6
III. 学会メーリングリストについて	6
IV. 会計からのお願い	6
V. 学会サイトについて	7
VI. 第34回年次大会について	7
VII. 研究発表・シンポジウム企画募集	7
VIII. 会員名簿に関するお願い	7
IX. 文献情報	7
英文学	8
独文学	9
仏文学	9
中世ラテン文学・イタリア文学・その他	10
特集 岡田真知夫先生ブログサイト	11

### I. 2019年度年次大会報告

日本支部の2019年度年次大会は、下記の通り滞りなく開催されました。ご参加いただいた皆様ならびに開催校の嶋崎陽一先生に、厚く御礼申し上げます。

[日時] 2019年12月14日(土) 12:00より

[場所] 龍谷大学 大宮学舎

(北麓北 203教室)

[大会費] 1,000円(会員のみ/学生無料)

[懇親会費] 5,000円(学生3,000円)

### 年次大会プログラム

\*開場(12:00)

\*ストーリーテリング ランスロット卿 ガウエイン卿  
～ガウエイン卿の死～(北101教室) 妙遊

\*開会の辞 支部長 嶋崎 陽一(龍谷大学)

\*第1部: 研究発表(13:00～)

司会: 伊藤 亮平(松山大学)

「ハルトマンからヴォルフラムへ——13世紀初頭  
ドイツにおける翻案と詩作——」

松原文(立教大学)

司会: 岡本 広毅(立命館大学)

「スウィンバーンのグリーン・アイド・モンスター:  
白い手のイズールト」

アイヴァジャン・リリス(慶應義塾大学後期博士課程)

\*第2部: シンポジウム(14:25～)

「Malory in Japan —日本では近年どのようなMalory  
研究がなされてきたか—」

司会・構成 高木真佐子(杏林大学)

「エクセターの衝撃—代読されたマッシューズ論文  
(1975)」

高宮利行(慶應義塾大学名誉教授)

「ド・ウォードの重要性を予見していた野口教授」

向井 剛(四国大学)

「勝利の方程式—ディテールにこだわる戦略」

高木真佐子(杏林大学)

「本の声を聴く—Globe版から1816年版の判型特定へ」

不破 有理(慶應義塾大学)

「翻訳・翻案されるマロリー」

小宮真樹子(近畿大学)

- \*音食紀行（みずき書林より、アーサー王レシピ本を出版予定）の試食イベント（北102教室）
- \*会員研究動向・情報交換フォーラム（17:20～）
- \*支部総会（17:30～）
- \*閉会の辞（18:00～） 支部長 嶋崎 陽一（龍谷大学）
- \*懇親会（18:30～）「京都駅前 京甚兵衛」

会員・非会員ともに多くの方にご出席いただき、2019年度年次大会も盛会のうち終了いたしました。特に開催校である龍谷大学の嶋崎陽一先生をはじめ、同大学生の中村陸さん、久保田真奈さんには大いにご尽力いただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。（文責：小宮真樹子）

#### 総会議事録

##### \*報告事項

##### (1) 学会サイト「アーサー王伝説解説」について

2019年度は多くの投稿があり、より充実した内容となった。今後もスペインやフランス、イングランドの作品で更新を予定している。

また、中世研究に関するアンケートにも協力をお願いしたい。

##### (2) 書誌活動報告

BIASはPDF版が2017年分まで本部サイトにアップされている。2018年の業績として、日本支部から6点の業績（フランス作品5点、イングランド作品1点）が掲載予定。

##### (3) 電子化移行と名簿について

去年より、電子化へ完全移行した。郵送を希望する会員以外には、電子メールを中心とした連絡を行う。不備などあれば事務局までご報告を。

##### (4) 2020年度年次大会について

2020年度の年次大会は、12月12日（土）に杏林大学で開催予定。

##### (5) 2020年度国際大会について

第26回国際大会は、イタリアのカターニア大学で、2020年7月19日から25日に開催予定。

##### \*審議事項

##### (1) 2019年度決算報告（2018年12月1日～2019年11月30日）

会計担当幹事の小川直之先生より会計収支決算が作成され、嶋崎会長の代読により報告された。

##### 収入

項目	収入額
年会費（62件）	186,000
寄付金（0件）	0
入会金（2件）	6,000
賛助会員費（1件）	5,000
小計	197,000
<b>【支部大会関連収入】</b>	
大会参加費	36,000
懇親会費	150,000
小計	186,000
2018年度からの繰越金	1,106,935
普通預金口座利子	6
総計	1,489,941

##### 支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費(未着)	180,463
ホームページ関連費用	6,962
事務用品代・雑費	9,966
通信費(含振込手数料)	17,140
小計	214,531
<b>【支部大会経費】</b>	
学生アルバイト代	10,000
懇親会費用	150,000
事務用品代・雑費	8,475
小計	168,475
2020年度への繰越金	1,106,935
総計	1,489,941

##### (2) 2020年度予算案提出（2019年12月1日～2020年11月30日）

続いて2020年度予算案が提出されたが、会員の承認を受けなかったため、以下へ修正した。

## 収入

項目	収入額
年会費(会員数 73 名@3,000 円)	219,000
寄付金	10,000
入会金	9,000
賛助会員費 (2 件)	10,000
小計	248,000
<b>【支部大会関連収入】</b>	
大会参加費	40,000
懇親会費	150,000
小計	190,000
2019 年度からの繰越金	1,106,935
普通預金口座利子	10
総計	1,544,945

## 支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	198,000
ホームページ関連費用	9,000
事務用品代・雑費	15,000
通信費(含振込手数料)	20,000
小計	242,000
<b>【支部大会経費】</b>	
学生アルバイト代	16,000
懇親会費用	150,000
事務用品代・雑費	10,000
小計	176,000
2021 年度への繰越金	1,126,945
総計	1,544,945

### (3) 新入会者承認について

以下3件の入会が承認された。

瀬戸 恭子氏 (推薦人: 岡本広毅・小宮真樹子)  
 武藤 奈月氏 (推薦人: 横山安由美・小宮真樹子)  
 みずき書林 (賛助会員)

(文責: 小宮真樹子)

## 研究発表要旨

ハルトマンからヴォルフラムへ——13 世紀初頭ドイツにおける翻案と詩作——

松原文 (立教大学文学部ドイツ文学専修)

ハルトマン・フォン・アウエの『エーレク』における美德概念、特に誠実 (triuwe) について考察した。13 世紀初頭前後のドイツ語圏では、フランス語の作品の翻案が盛んにおこなわれ、『エーレク』はアーサー王物語がドイツ語圏に紹介された最初の作品である。原典に存在しないエクスクルスの追加や「騎士道」の概念化、描写の長大化といったその後のドイツ宮廷叙事詩に受け継がれることになる特徴を有する。

発表ではまず「騎士道」概念の研究史を振り返り、1920 年代にエリスマンなどによって着手されその体系化が試みられたこと、戦後は関心が後退し新しい展開がなかったこと、2000 年以降フレーム理論をもちいた言語学の関心から用例研究が進められていることを報告した。その上で、『エーレク』における 50 余りの „triuwe “ の用例を『イーヴァイン』とヴォルフラムの『パルチヴァール』における用例と比較し、以下の三点を明らかにした。(1) 『エーレク』において „triuwe “ の登場頻度は比較的低い、ヴォルフラム以降急増し、用例の 3 割程度を占めることになる „mit triuwe “ (“確かに、心から”) などの語自体の意味が希薄化した定型の強調表現は 3 例に留まること。

(2) 約半数の用例がエニーテのエーレクに対する愛や貞節を表すものであること。夫に沈黙を強要されたエニーテは、迫る危険を夫に知らせるため沈黙を破るべきか否か、従順と愛 (triuwe) の間で苦悩する。(3) „triuwe “ はミンネ „minne “ と対立するものとして位置づけられる。また „triuwe “ は „staete “ や „guot “ などの近接する概念と並列され、言い換えられることが多いが、 „minne “ は „liebe “ 以外の上記の概念と相互の入れ替えはなく、その主体も男性に偏っていること。

„triuwe “ の語義は広く、 „minne “ の対立項である場合と、より普遍的な価値を示す場合とが混在する。今後は名誉 (êre) の必要条件としての „triuwe “ という切り口から作品間比較を進めたい。

## シンポジウム要旨

「Malory in Japan: 日本では近年どのような Malory 研究がなされてきたか」

司会・構成 高木眞佐子 (杏林大学)

1469年に成立したとされる Malory のテキストは、2019年に成立 550周年を迎えた。本シンポジウムは、この記念すべき年に、Malory 研究が日本の研究界においてどう発展してきたのか、日本支部会員の歩みを中心に振り返ったものである。

日本人研究者による戦後の Malory の言語・テキスト研究は多岐にわたり、量も多くまた精緻であったが、1975年頃までは多くが日本国内向けに留まっていた。その後研究成果が英語でも紹介されるようになり、世界的に注目されるようになった。Malory のテキスト成立に関する最新の学説には、そうした研究成果が大いに役に立っている。なかでも、本支部会員として活躍した野口悠一氏、中尾祐治氏、加藤誉子氏らの功績が特筆に値する。上記の状況については、高宮利行氏が 1975年の Exeter での重要な国際学会の様子について、向井剛氏が野口俊一氏の業績について、高木眞佐子が中尾祐治氏と加藤誉子氏の業績について、それぞれ報告を行った。

2019年現在では、文学作品の出版史研究がひとつのトレンドだ。不破有理氏は 19世紀英国での Malory 作品の出版競争に光を当て、これまで世界でも知られていなかった印刷出版業者の動向について明らかにした時の様子を報告した。最後の登壇者は日本における Malory の翻訳文化について報告を行った小宮真樹子氏であるが、彼女は同時に Malory のメディアミックス化という新しい潮流の先端をも走っている。

日本人学者による Malory 研究は、戦後 70年を経て世界で確固たる地位を占めるようになっただけでなく、新たな動向を牽引する主導的な存在にまで成長したといえよう。5人の登壇者によるシンポジウムは熱気に満ち多くの聴衆に恵まれた。報告後のディスカッションも短いながら鋭い質問もあり、重要な問題提起も行われた。関係各位の

熱心な参加とご協力に、心より感謝申し上げたい。

### ①エクセターの衝撃—代読されたマシューズ論文 (1975)

高宮利行 (慶應義塾大学名誉教授)

1975年夏、英国西部のエクセター大学で開催された国際アーサー王学会で、UCLA のウィリアム・マシューズ教授 (1905–1975) が、マロリー作品の第 2話をキャクストン版第 5巻に短縮したのはマロリー自身であったとする研究発表を行う予定であった。しかし、学会直前に急死した教授の発表原稿は、友人のロイ・F・レズリーによって代読され、質疑応答はなかった。スコットランド訛りの強いレズリーの代読は外国人には理解が難しかったが、会場にいたピーター・フィールドが無許可で録音したテキストが、後日私の元にも送られてきた。かくして、この重要な仮説は変則的な形で世界中に流布していったが、*Aspects of Malory* (1981)に収録する提案は拒否され、ようやく目の見たのは *Arthuriana*, 第 7巻においてであり、最終的には *The Malory Debate* (2000)に採録された時には、2種のテキストが印刷されたのである。

マシューズは 1905年、ロンドンの下町で生まれたコックニーで、地元の小学校を卒業後英国議会の弁護士事務所働きながら、ロンドン大学バーベック・コレッジに長年夜学生として勉学、学士、修士、博士号を取得して、1929年にはその年のコレッジ最優等生に選ばれた。研究者としての経歴はコックニー方言の分析から始まり、日記文学や自叙伝の英語研究に移った。1939年に UCLA の教員となり、長くサミュエル・ピープスの日記の編纂に携わったが、全 11巻の完成出版 (ロバート・レイサムと共編) は死後の 1983年だった。

彼のマロリーへの関心は、長い間マロリーの種本『頭韻詩アーサーの死』に関する唯一の研究書となった *The Tragedy of Arthur* (1960)に始まり、*The Ill-framed Knight* (1966)では、ウォリックシャー出身のマロリーこそ『アーサー王の死』の著者

だとするウジェヌ・ヴィナーヴァ説に対して、作品の言語分析からヨークシャー出身のマロリーを提唱した。1970年に出版した‘Caxton and Malory: A Defense’に続いて、‘Who Revised the Roman War Episode?’を発表する予定であった。死後、*Caxton’s Malory* (1983) が出版されたが、高宮らに批判された。

## ②De Wordeの重要性を予言した野口教授

ーテキスト派生（ステマ）考察ー

向井 剛（四国大学 福岡女子大学名誉教授）

故野口俊一先生のマロリー学への貢献として、E. Vinaver校訂本（1947年）に対する本文修正および校訂に対する諸提案が1967年の改訂第2版で取り上げられ、‘Corrigenda’として所収されたことを紹介した。人文学研究が西洋の研究をわが国に輸入・紹介することに重きがあるなかであって、テクスチュアル・ファクトに限定しながら、同じ国際的な舞台に立って貢献をはからんとする姿勢の一つの表れであり、その後続く日本からの目覚ましい研究発信の先触れとなった。併せて、パネリストの高宮先生が扱った「著者マロリーが第5巻を改訂した」と主張するW.マシューズ説に対して、中尾祐治教授とともに、キャクストン改訂説の論陣を張る論考をそれぞれ発表したことを紹介し、話題を本文派生（ステマ）の議論に転じた。

1970年代後半、野口教授は、今後は「受容 (reception)」の問題が重要になるであろうと語るなかで、発表者である私に、初期印刷本の一つであるジョン・ライランズ図書館蔵のウィンキン・ド・ウォード版『アーサーの死』(1498年)のフォトスタットを示された。それをういた調査が実を結ぶのは1997年のことであり、同版の折丁Y4・5の本文が、組版に際して依拠したはずのキャクストン版ではなく、むしろウィンチェスターに近い読みがあることが判明し、ステマを考えるうえで、ド・ウォード1498年版の重要性が明らかとなった。

研究の潮流は一回りし、インターナショナルな研究から、或いはこうした国際的な研究と同時に、国内への正確な作品享受の重要性がうたわれる昨今である。今回のシンポジウムでは、このような感想を強く持った。

## ③本の声を聴くーGlobe版から1816年版の判型特定へー

不破有理（慶應義塾大学）

アーサー王物語はどのように受容され、現代まで生き残ったのか、という大学院生時代からの疑問を解く研究の旅は、修士論文の題材として高宮利行先生から提示されたグローブ版 (Globe edition) の研究から始まった。Caxton版を底本とするグローブ版の *Morte Darthur* は、19世紀のアーサー王物語の受容の在り方を示す改竄テキストである。当時の道徳的風潮に見合うように、「性的なニュアンス」を帯びると編集者が判断した語彙や表現はざっくり削除あるいは改変された。結果的にアーサー王物語はより多くの読者を獲得することになったのである。

このグローブ版編者 Sir Edward Strachey が、19世紀中葉までアーサー王物語の受容に寄与したテキストとして挙げたのが、1816年版の Walker 版と Wilks 版である。1634年 Stansby 版を最後に180年以上も Sir Thomas Malory の『アーサー王の死』は印刷されず、底本とするキャクストン版はその存在さえ特定するのが難しい状況であった。それゆえ両版はスタンズビー版を底本とするが、1816年版のうち後発となった Wilks 版の序文には、ライバル版の出現に怒りを爆発させた編者の肉声が綴られている。なぜ Wilks 版は Walker 版に先を越されたのか、というテキストの印刷競争の謎を解く探索結果は、すでに Edition Synapse (東京、2017年) から1816年の両版と1817年の Southey 版を復刻した際に、その書誌学的な分析をもとに日英両言語でまとめた。本シンポジウムでは英国で調査・収集した画像の数々を紹介しながら、出版の帳簿や印刷用紙の Watermark や釘穴、組版の特徴や活字の濃淡など現存するテキストに残された痕

跡と当時の印刷状況などの傍証を積み上げた結果、これまでの通説とは異なり、Wilks 版は 12 折本、Walker 版は 24 折本である可能性が極めて高いことを示した。出版競争の真相に迫るためには、いかにして書物は成立するのかその過程を辿ること、そして最後の決め手となるのは書物に残された物証が語る声に耳をすませること、この作業を通して、判型が印刷競争を制する一つの要因として同定することが可能となった。

19 世紀初期のアーサー王物語のテキストの印刷出版状況の分析によって、アーサー王物語復活を彩る黎明期の状況が浮かび上がるのである。

#### ④「翻訳・翻案されるマロリー」

小宮真樹子（近畿大学）

『アーサー王の死』の筆者トマス・マロリーの名は古くから日本でも知られていたようだ。一方、彼を原作としながら、実際は再話ものに依拠した翻訳書も多かった。本発表ではそうした出版物を紹介した。

栗原古城訳の『アーサー王物語』（1925）は、「トマス・マロリー原著」と記載しながら、序文で述べているように、Waldo U. Cutler の書籍に基づいた内容である。

白川渥の『アーサー王物語』（1952）も、「原作・マロリー」の表記に反し、序文で「あたらしい解釈と改訳を加えてみた」と述べている。その構成や内容には、トマス・ブルフィンチからの強い影響が伺える。

大宮杉の 1956 年版は、ブルフィンチから取ったと思われる設定が白川版とほぼ一致する。つまり、大宮はマロリーもブルフィンチも読まず、白川版に依拠していた可能性が高い。

本間久雄訳の『少年少女世界文学全集 4』（1961）は、あとがきに「少年少女のための書物を参照にした」と記している。調べたところ、1955 年に出版された Barbara Leonie Picard の翻訳であった。

中川正文訳『アーサー王物語』（1963）も、Alice M. Hadfield の *King Arthur and The Round Table*

（1953）が原本である。中川はあとがきにおいて、当時最新の研究動向に言及している。それにもかかわらず、翻訳に選んだテキストは適切とは言い難いものであった。

結局、学問的に評価できるマロリー邦訳は、1966 年の厨川版を待たねばならなかった。1995 年にマロリーを完訳した中島は、序文において『アーサー王の死』翻訳状況を嘆く。きちんと原典を参照せず、権威付けのためだけにマロリーの名を掲げる日本の改変は「フランスの本にはそうある」を再現するかのようで、興味深い現象ではある。だが、その面白さを楽しむ前提として、信頼できるマロリー邦訳が必要とされているのだ。

## II. 電子化について

国際アーサー王学会日本支部では、会員の皆様への連絡手段に、メーリングリスト等の電子媒体を活用しております。ただし、ご希望の方へは郵送での連絡を続けております。まだご回答いただけない場合、事務局 ([office@arthuriana.jp](mailto:office@arthuriana.jp)) までご連絡くださいますようお願いいたします。

## III. 学会メーリングリストについて

現在、学会員用メーリングリストは間接投稿とさせていただきます。投稿を希望する場合、まずは事務局まで文案をお知らせください。役員で確認後、配信いたします。

また、希望の方には日本支部よりメールアドレスを新規発行いたします。この件も事務局までご連絡ください。

## IV. 会計からのお願い

2020 年度分（ならびにそれ以前の未納分）会費の納入をお願い申し上げます。会費は同封の「払込取扱票」にてお支払いいただくか、下記口座に直接お振込みください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部

ゆうちょ銀行口座番号：00250-6-41865

(ゆうちょ銀行以外の金融機関からの振込み)

加入者名：国際アーサー王学会日本支部

金融機関：ゆうちょ銀行（コード：9900）

店名：〇二九（ゼロニキュウ）店（店番：029）

預金種目：当座

口座番号：0041865

年会費は3,000円です。また新入会員の入会時には入会金3,000円を頂いております。新規入会希望者をご推薦いただく際には、希望者にその旨お伝えくださいますようお願いいたします。

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を随時募集しております。ご寄付いただけます場合、「寄付〇口」とお書き添えの上、同封の払込票をご利用のうえ年会費とともにお振込みいただくか、直接口座にお振込みください。皆さまの温かいご支援をお待ち申し上げます。（会計：小川直之）

【お知らせ】会費納入が5年連続して確認できなかった場合、退会扱いとさせていただきますのでご注意ください。（この手続きに関しましては、2016年度第1回幹事会にて確定されました。）

## V. 学会サイトについて

学会公式サイトでは、支部大会や国際大会のお知らせを掲載しております。

「アーサー王伝説解説」の項目に、ついに「聖杯」登場、年代記の『散文ブルート (Prose Brut Chronicle)』、仏文学では『狐物語』とトリスタン伝説、神話学的研究紹介、『シランスの物語 (Le roman de Silence)』、独文学ではゴットフリートの『トリスタン』、『ティトゥレル』と、アーサー王学会ならではの豊かなラインアップが公開となりました。

学会公式ツイッター (@inter\_arthur\_jp) でも随時情報の発信中。写本や映画、新刊などを幅広く紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

学会公式サイト

<http://arthuriana.jp/index.php>

学会公式ツイッター

[https://twitter.com/inter\\_arthur\\_jp](https://twitter.com/inter_arthur_jp)

(Web委員長：不破有理)

## VI. 第34回年次大会について

第34回年次大会はオンラインで開催されます。（詳細は同封の大会資料をご覧ください。）

日時：2020年12月12日（土）13:30 開会（入室可）

会場：Zoom

Web上の支部大会の準備を進めております。

賛助会員の書店展示について、

・丸善雄松堂さま ・みずき書林さま共に、カタログ・学会割引特典付きでPDFでお寄せ下さることになりました。学会員であれば、みずき書林さんは期間限定せずに特典適用して下さるそうです。詳細は近日中にWeb公開いたしますので、Webの「支部大会情報」をご注目ください。

(Web委員長 不破有理)

## VII. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら庶務までお寄せください。シンポジウムは同年7月末、研究発表は同年8月末を締切とし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

## VIII. 会員名簿に関するお願い

名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに庶務までお知らせください。なお会員に配布される名簿に関しては、一部の事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を未掲載にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

## IX. 文献情報

ここでは、当学会会員であるか否かに関わらず、国内で出版されたものを中心に西洋中世文学関連の刊行物を紹介しています。

### 英文学（書誌担当：岡本広毅）

#### <研究（単行本）>

新井由紀夫『中世のジェントリと社会』（世界史リブレット）山川出版社、2020年。

大石和欣『家のイングランド—変貌する社会と建築物の詩学—』名古屋大学出版会、2019年。

佐藤 猛『百年戦争—中世ヨーロッパ最後の戦い—』中央公論新社、2020年。

陶山昇平『薔薇戦争—イングランド絶対王政を生んだ骨肉の内乱—』イースト・プレス、2019年。

松田隆美『チョーサー『カンタベリー物語』—ジャンルをめぐる冒険—』慶應義塾大学出版会、2019年。

松田隆美『究極の質感（マテリアリティ）—西洋中世写本の輝き（第31回慶應義塾図書館貴重書展示会図録）—』慶應義塾図書館、2019年。

#### <研究（雑誌・紀要論文等）>

井口篤，“Reginald Pecock’s Theology of Reason,” 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』51、2020年、pp. 17-36.

石黒太郎，“Parentheses in Old English Poems,” *Poetica* 93/94, 2020年、pp. 67-82.

石原覚「詩篇 15:10における cum vultu tuo の古英語訳について」『愛知県立大学外国語学部紀要』52、2020年、pp. 1-21.

上野未央『15世紀ロンドンにおける「外国人」：出身地と居住地から』（比較文化学部20周年号）『大妻比較文化』21、2020年、pp. 5-19.

浦田和幸「後期古英語における願望・命令表現の一考察—『ウェストサクソン福音書』の《山上の垂訓》を資料に—」『語学研究所論集』24、2020年、pp. 17-35.

小倉美知子，“‘To die, to be dead, to be lifeless or unliving, and to be killed’ in Old and Early Middle English,” *Poetica* 93/94, 2020年、pp. 49-66.

小澤 実「「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ：オックスフォードの中世グローバルヒストリー」（〈特集〉グローバルヒストリーと中世ヨーロッパ(1) イギリスの視点）『史苑』（立教大学史学会）80(1)、2020年、pp. 95-109.

貝塚泰幸「『サー・ガウェインとカーライルのカーン』の「馬の試練」」『アーサー王伝説研究』渡邊浩司編 [仏文学の項目参照]、2019年、pp. 271-302.

狩野晃一「中英語版パラディウス『農業論』解説と試訳」『明治大学農学部研究報告』69(2)、2020年、pp. 47-56.

小島基洋「『大いなる遺産』『アーサー王の死』『マクベス』：英文学作品を換骨奪胎する J. K. Rowling」『英文学評論』（京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会）92、2020年、pp. 25-32.

小宮真樹子「アーサー王伝説における騎士と狂気」『幻想と怪奇の英文学 IV 変幻自在編』東雅夫・下楠昌哉編、春風社、2020年、pp. 318-37.

齊藤雄介「中英語期における liken の意味及び用法について」『大学院年報』（立正大学大学院文学研究科）37、2020年、pp. 57-76.

宅間雅哉「古英語 cōl に水文景観以外の景観が後続するイングランドの地名」『東京未来大学研究紀要』14(0)、2020年、pp. 115-28.

玉川明日美「『サー・ガウェインと緑の騎士』における「価値」」『アーサー王伝説研究』pp. 303-29.

松田隆美「注釈の編集文献学—ヨーロッパ中世文学と注解書写本」『書物學』17号、勉誠出版、2019年、pp.8-14.

松田隆美，“A Small Didactic Florilegium in MS Takamiya 15,” *Poetica* 91/92, 2019, pp.15-25.

松田隆美「驚異の場としての「聖パトリックの煉獄」」『この世のキワー〈自然〉の内と外』山中由里子・山田仁史編、勉誠出版、2019年、pp. 93-108.

#### <研究書の翻訳>

アンドレア・ホプキンズ『図説アーサー王物語 普及版』（山本史郎訳）、原書房、2020年。

#### 独文・北欧文学（書誌担当：田中一嘉）

##### <研究（雑誌・研究紀要等）>

河崎靖「ゲルマン文化圏における『聖書』の成立」『ドイツ文学研究報告』（京都大学人間・環境学研究所ドイツ語部会編、）65、2020年、pp.1-88.

嶋崎啓「現在の事態における推量を表す未来形成の経緯」『文化』（東北大学文学会）83号（1・2）、2019年、pp. 93-76.

嶋崎啓「ドイツ語未来形の歴史的発達におけるwürde+不定詞の位置づけ」『文化』（東北大学文学会）82号（3・4）、2019年、pp. 15-32.

白木和美「ウルリヒ・フォン・ツァツィクホーフエン『ランツェレット』概論」『アーサー王伝説研究』、pp. 189-208.

林邦彦「『ブリタニア列王史』のアイスランド語翻案『ブリトン人のサガ』の二バージョン」『アーサー王伝説研究』 pp. 209-238.

林邦彦「北欧のランスロット物語？：『美丈夫サムソンのサガ』再考」『尚美学園大学芸術情報研究』32、2020年、pp.55-74.

松原文「ガーヴァーン物語とパルチヴァール—『パルチヴァール』における二人の主人公の接合と馬の関与—」『アーサー王伝説研究』、pp. 331-360.

渡邊徳明「怪異に対する本能的畏怖についての現象学的ディスコース」『リュンコイス』（桜門ドイツ文学会）52、2019年、pp. 97-113.

#### 仏文学（書誌担当：横山安由美）

##### <研究（単行本）>

渡邊浩司編著『アーサー王伝説研究 中世から現代まで』中央大学出版部（中央大学人文科学研究センター研究叢書71）、2019年、484p. [2016年刊行『アーサー王物語研究』の姉妹編。中世から現代までの「アーサー王伝説」の諸相に着目した、16編からなる論文集。分析対象には物語群だけでなく図像や映像も含まれている。第

1部ではイタリアとフランスの中世期の図像表現、第2部ではロベール・ド・ボロン、『フィロメーナ』と中世イタリアの『円卓物語』、第3部では『ランツェレット』、『ブリトン人のサガ』、トマス・マロリーと『平家物語』、第4部では騎士ガウェインの諸相、第5部ではスタインベック作『アーサー王と気高い騎士たちの行伝』、ブレソンの映画『湖のランスロ』、グラックの小説『アルゴールの城にて』と戯曲『漁夫王』、に焦点が当てられている。K.W.]

##### <研究（雑誌・研究紀要等）>

伊藤洋司「『湖のランスロ』——ロベール・ブレソンの映画における恋愛、運動、死」『アーサー王伝説研究』 pp.403-422.

岡田真知夫[末尾の【特集】にまとめて記載]

大高順雄、「Langue et Index nominum de *La fin de l' homme* dans le manuscrit M de l' université Otemae」、『大手前大学論集』19、pp.179-224.

小沼義雄、「Enide et Diane : le mythe cynégétique et la *translatio imperii* dans *Erec et Enide*」、『Miroirs arthuriens entre images et mirages : Actes du XXIVe Congrès de la Société Internationale Arthurienne, édités par C. Girbea, M. Voicu, I. Panzaru, C. Anton, A. Popescu, Brepols, 2020 « Culture et société médiévales » (CSM.34), pp.329-339.

篠田知和基「ジュリアン・グラックの『アルゴールの城にて』と『漁夫王』」『アーサー王伝説研究』 pp.423-442.

瀬戸直彦「マルカブリュにおける二つの「思考」(PC 239, 19) —ことわざ引用の妙—」『Études Françaises』（早稲田フランス語フランス文学論集）27、2020年、pp.1-27. [異色のトルバドゥール Marcabru の「友人たちよ ここに二つの考えがある」で始まる作品を、A写本によるショート・ヴァージョンから校訂し、従来の長いヴァージョンと比較して、その存在意義を確認した。2009年に発表した論考(in *La France Latine*, t. 148, pp.125-144)をもとに、テキストを一部訂正し、作中の「大山鳴動して鼠一匹」という西欧の古代からあることわざの引用の巧みさをあらためて考えてみた。N.S.]

高名康文「『狐物語』と『フォヴェール物語』における人間/動物/仮面」『ヨーロッパ文化研究』（成城大学大学院文学研究科）39、2020年、pp.79-99.

高名康文「13世紀における都市の勃興と文学——アラスの場合」中野隆生・加藤玄編著『フランスの歴史を知るための50章』明石書店、2020年、pp.96-101.

高名康文「フォヴェール、ルナール、フォルトウーナ：『狐物語』後継作と『フォヴェール物語』」『伝語伝文学研究（月村辰雄先生退職記念特集号）』（東京大学伝語伝文学研究会）52、2019年、pp.3-18.

松村剛、「*Sur un mot fantôme dans Artus de Bretagne : le plus maistre du jour*», *Glaliceur* 14, 2020, pp.1-16.

宮下志朗「いにしえ人の日記(1)『パリの住人の日記』を手始めに……」『ふらんす』(白水社) 95、2020年、pp.72-74. [連載中]

宮下志朗「「読む薬」をもっと気軽に手にとるには(特集 モンテーニュ『エッセ』の読み方)『ふらんす』(白水社) 94、2019年、pp.10-12.

村山いくみ「『寓意オウィディウス』における『ピラムスとティスベ』：ピラムスの死の動機と寓意的意味」『伝語伝文学研究（月村辰雄先生退職記念特集号）』（東京大学伝語伝文学研究会）52、2019年、pp.207-223.

村山いくみ「『フィロメーナ』の伝承と解釈」『アーサー王伝説研究』pp.107-146.

横山安由美「時は1429年、再び太陽は輝き始めて：クリスティヌ・ド・ピザン『ジャンヌ・ダルク讃歌』の文学的意味」『伝語伝文学研究（月村辰雄先生退職記念特集号）』（東京大学伝語伝文学研究会）52、2019年、pp.19-38.

横山安由美「ロベール・ド・ボロンにおけるアーサー王像と政治思想について」『アーサー王伝説研究』pp.79-106.

渡邊浩司「中世フランス文学における英雄の剣—ボードゥーの剣オノレをめぐって」『人文研紀要』（中央大学）93、2019年、pp. 239-255.

渡邊浩司「テッサ城（フランス・イゼール県）の壁面に描かれたペルスヴァルの幼少年期」『アーサー王伝説研究』pp. 361-379.

#### <翻訳>

フィリップ・ヴァルテール「ガロ＝ローマ期の2つの3母神像」（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）、『流域』（青山社）86、2020年、pp. 46-50.

フィリップ・ヴァルテール「豊穡の女神—ケルトの母神から中世の妖精まで」（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）、『中央評論』（中央大学）72巻2号（通巻第312号）、2020年、pp. 123-131.

ミレイユ・セギー「畏としてのロマン—『グラアルの物語』の『続編』群（13世紀）をめぐって」（渡邊浩司訳）、『伝語伝文学研究』（中央大学伝語伝文学研究会）52、2020年、pp. 39-65.

ジャン＝シャルル・ベルテ「マルジンとメルラン—固有名詞研究から神話学まで」（渡邊浩司訳）、『ケルティック・フォーラム』（日本ケルト学会）22、2019年、pp. 29-39.

ジャン＝シャルル・ベルテ「『イラスとソルヴァス』—知られざる（韻文）円卓物語の断片」（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）、『中央評論』（中央大学）72巻1号（通巻第311号）、2020年、pp. 96-111.

なお、ヴァルテール著、渡邊浩司・渡邊裕美子先生訳の『アーサー王神話大事典』（原書房）が「日本翻訳家協会2018年度翻訳特別賞」を受賞されました。おめでとうございます。

#### <書評>

『アーサー王伝説研究』に関する書評

- 1) 小栗友一、『週刊読書人』第3329号、2020年2月28日、p. 5.
- 2) 椿侘助、『中央評論』（中央大学）72巻1号（通巻第311号）、2020年4月、pp.173-179.

中世ラテン文学・イタリア文学・その他（書誌担当：横山安由美）

<研究（単行本）>

沓掛良彦『耽酒妄言』平凡社、2020年、269p.  
村松真理子他『世界文学の古典を読む（放送大学  
教材）』NHK出版、2020年、320p.

#### <研究（雑誌・研究紀要等）>

金沢百枝「モデナ大聖堂「魚市場の扉口」のアー  
サー」『アーサー王伝説研究』pp.3-20.  
狩野晃一「中世イタリアのトリスタン物語『円卓  
物語』」『アーサー王伝説研究』pp.147-186.  
沓掛良彦「『イリアス』への招待」を読んで：  
一読者としての感想『ペディラヴィウム：ヘ  
ブライズムとヘレニズム研究：原始キリスト教  
とヘレニズム文庫紀要』74、2020年、pp.70-  
88.  
増山暁子「イタリア北部のアーサー王サイクルの  
壁画」『アーサー王伝説研究』pp.21-42.

#### <翻訳>

ウィリアム・オヴ・レンヌ『ブリタニア列王の事  
績—中世ラテン叙事詩』（瀬谷幸男訳）論創  
社、2020年、228p. [ジェフリー・オヴ・モ  
ンマス『ブリタニア列王史』を英雄叙事詩に翻  
案した幻のアーサー王物語。本邦初訳]

#### <その他>

ピエルドメニコ・バッカラリオ他著、小谷真理監  
修『世界 魔法道具の大図鑑』西村書店、  
2020年。[「危険な座」「飛ぶチェス盤」「貴  
婦人の帯」などアーサー王伝説にかかわるモチ  
ーフも多数掲載された美しい絵本]

#### ★★ 【特集】 ★★

岡田真知夫先生ブログサイト ISLE D'AVALON

<<http://mac-okada.cocolog-nifty.com/blog/>>よ  
り抜粋（右サイドエリア下方の検索窓に、記  
事のタイトルが含む語をキーワードとして入力  
して探してみてください。M.O.）

<ゴヴァン Gauvain はガウエイン Gawain だっ  
た>

<同（補遺）>

— 「騎士道の華」と謳われた人物の名は、12-14  
世紀のフランス語作品において、どのように綴り  
どどのように発音していたのか。

<「内的複数」(pluriel interne)> (1-3)

— 不定冠詞なら男性被制格で uns, 女性で unes  
という形がその標識となる「内的複数」の現れ  
方を用例に即して探ってみた。

<Demanda> (連載物)

— ポスト流布版『聖杯探索』A Demanda do  
Santo Graal の冒頭部のテキストを読みながら  
進める 15 世紀ポルトガル語入門の試み。P.ベ  
ックによるロマンス語文献学のマニュアルに依  
拠。

<「代名態」の SOI REGARDER>

— 「中動態」とも呼べる動詞の表現様式の価値を  
soi regarder について用例に即して検討。ステ  
ファニーニの精細な分析を紹介。

<... que pour/de + infinitif> (1-2)

— au chastiel qui ordonnés estoit que pour lui  
recevoir 「彼を迎える用意ができた城に」  
（『メリアドール』11305), tres grant desir  
que de laiens oïr nouvelles 「そこで情報を聞  
きたいという強い望み」（同 5854）— ワロニー  
語法あるいはベルギー語法として存続するこの  
表現と無用とも思える que の価値について。

<ロットの妻=アーサーの妹=モルドレの母>

— ポスト流布版（フス本）『メルラン続編』によ  
ると、アーサーの子としてモルドレを生んだロ  
ットの妻は、アーサーの full sister だったとい  
うこと。

<グリフォンとドラゴン—アーサー王が見た予  
知夢>

— アーサー王が彼自身の最期とローグル王国の崩  
壊を予兆する夢を見るという『ランスロ』とポ  
スト流布版（フス本）『メルラン続編』が伝え  
るエピソードに登場する怪鳥について。

<La Douleoureuse/Joyeuse Garde の Garde とは  
何か> (1-9)

— 『ランスロ』で主人公が征服・解放し、『散文  
トリスタン』でトリスタンとイゾーの居城とな  
る場所の名が含む garde という語を、あちこ  
ち蛇行しながら検討。

<ブランギャン>

<同（続）>

<ブラングウェン, ブランゲーネ>

— イズーの侍女の名の綴りと発音。そしてそのカタカナ表記。

<漁夫王の傷と動詞 *ferir*> (1-7)

— 漁夫王が股間に傷を負ったという出来事を動詞 *ferir* を用いてどのように表現しているかという点に着目し、クレチアンの『ペルスヴァル』、散文の『ランスロ』、流布版『散文トリスタン』、『アーサーの書』、流布版『聖杯探索』などに拾えるそのくだりを読む。

<デュランダルを *ferir* する>

— リヨン写本が伝える『ロランの歌』v.1495 *Por li brisier li a grant cop ferue* の解釈の試み。

動詞 *ferir* の構文（補語のとり方）を検討。

<elle に代わる *il* と *elles* に代わる *il(s) / eux*>

<同（補足）>

— 『メリアドール』9853 の *ele* に代わる（と思われる）*il* が気になって書き留めたメモ。

<「手が焼かれる（『薔薇物語』v.7349）— イズーとフェニス>

<「今にもこの手を焼いてしまいそうだ」（『メリアドール』20704）>

— ルコア版『薔薇物語』v.7349にある（<中傷> *Male Bouche* の）「手が焼かれてしまえばよい」という表現の含意を示唆するエピソードが『トリスタン』とクレチアンの『クリジェス』にあること、そしてフロワサールの『メリアドール』にも同じような用例が拾えることを報告。

<仇討ちのやり方>

— ルシノ版『ラギデルの仇討ち』vv.432-3: *Lors dist qu'il sera ja vengies del chevalier qu'il n'amoit pas* — この2行の解釈が読書会で問題となったのをきっかけに、*vengier* という動詞を使って「復讐する」「恨みを晴らす」という行為をどのように表現していたのか調べてみた。

<*mar* を用いる否定命令と除外の *que*>

— *Ja mar ferez que solement comander ...* (ローチ版『ペルスヴァル』5218-9) の解釈。

<ロンツァとロンズ（オンス）> (1-8)

— ユキヒョウを指すらしい語 — 伊: *lonza*, 仏: *lonce · once* — の使用例を、いくつかのテキストに拾ってみる。中世イタリア語で書かれた『オオカミ猫の物語』とパツラミデッセ（パラミデス）の歌は、一応アーサー王ものとしてカウントできる。とくに後者（13世紀後半）は、『散文トリスタン』を知っていた作者の文学的な遊戯の趣がある。

<ボクはボークーなのか? *Gauvain* は碁盤なのだ!>

— *Gauvain* は「ゴーヴァン」ではなく「ゴヴァン」でしょうとあがいている。

<「涙滴文」のある盾 — 『ランスロ』と『散文トリスタン』>

— 「涙滴文」のある盾を帯する — そしてイズーに虚しく想いを寄せる — 騎士の姿は『散文トリスタン』の第一バージョン（「簡約版」）にも認められることを、『涙と眼の文化史 — 中世ヨーロッパの標章と恋愛思想』の著者徳井淑子さんに報告し、同氏が紹介しておられる「ソミュールの武芸試合」には『ランスロ』だけでなく『散文トリスタン』の影響もあった可能性を示唆。

<*Avalon*>

— この固有名 = 地名についての独り言とタイトルにこの地名を含む古い拙論へのリンク。

<*Guingamor*>

<同（続）>

— この固有名の発音とカタカナ表記について。

<『アミとアミルの友情』— 古仏語の入門書>

<同（補足）>

— いまだに価値を失っていない半世紀以上前の入門書について。

編集・発行

国際アーサー王学会日本支部事務局

〒577-0813

大阪府東大阪市新上小阪228-3 EキャンパスA館 近畿大学文芸学部 小宮真樹子研究室内

Email: [office@arthuriana.jp](mailto:office@arthuriana.jp)

メンバーリスト: [members@ml.arthuriana.jp](mailto:members@ml.arthuriana.jp)

学会ウェブサイト: <http://www.arthuriana.jp/index.php>